

第12回 浜松市芸術祭 演劇部門

とき→11月27日(日)

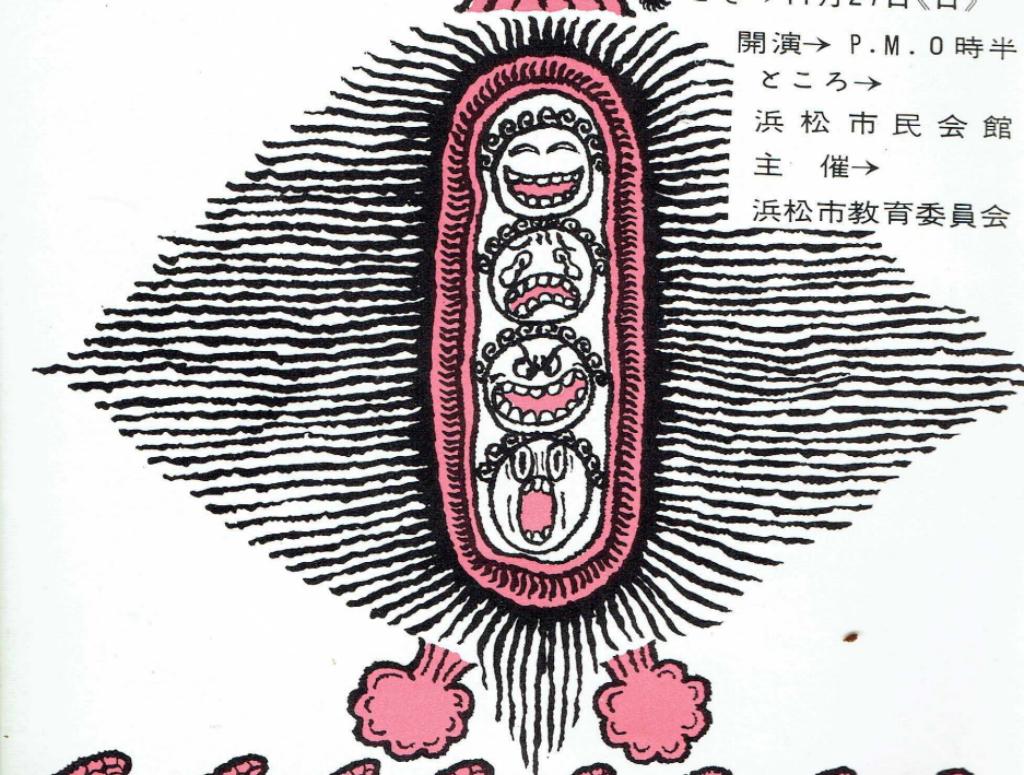
開演→ P.M. 0 時半

ところ→

浜松市民会館

主催→

浜松市教育委員会



■地方における演劇活動は年々才々、困難の度を加えつつある。いわく、物価の高騰による経済的な諸問題、いわく、減少する人員等々。それは再生産ができない業余劇団の宿命かもしれない。しかし「演劇不毛の地」を黙々と耕し続けて「芸術祭」もここに12回。ようやくこの地方の文化史をひもとく上に、無視出来ない存在になつ

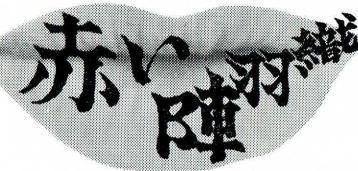
た。すべてのものが中央に集約される現状だが、われわれは地方において活動する事に深い意義を感じる。もう、中央にコンブレックスを抱かない。地方に甘える事もない。気ながに腰を落ちつけて頑張りたい。そうする事がわれわれの使命であり、地方において明日の文化に貢献する事になるのだから

(芸術祭実行委員長・村越一哲)

ぶ ろ ぐ ら む

赤い陣羽織 1幕* 12.30~1.30
*****劇団だるま***
三年寝太郎 1幕* 1.45~2.45
*****劇団石っころ***
さっぽ夜話 1幕* 3.00~3.50
*****国鉄浜松工場演劇部***
*彼らはわたしを追ってくる、わた
しは先へ進まねばならない*光と
音による習作*** 4.05~5.05
*****劇団なかま***
一族再会 1幕* 5.20~6.10
*****N H K 浜松放送劇団***

木下順二・作



■スタッフ

演出||土師健司

舞台監督||小池良枝

舞台美術||伊野光嶺

効果||中野光子

照明||村田政美

衣裳||中島ゆう子

衣裳製作||劇団だるま

■キャスト

お代官||岩崎龍太郎

その奥方||鈴木宣子

お代官のこぶん||池沼和彦

庄屋さま||古橋博征

おやじ(百姓)||古賀昭隆

その女房||大橋啓子

孫太郎||長谷喜代治

腰元||多勢

門番たち

■梗概

おやじとおかげは村一番仲のいい、そして村一番の働きものの夫婦でした。

この村のお代官さまは、おやじにそつくりな猫背で、ちんちくりんの醜男ですが、おかげときたら、これはまた絶世の美。村一番のきりょうよしのおかげに魅せられ、よこしまな心をおこしました。

お代官さまは、ご自慢の「赤い陣羽織」同様、大変に重宝な権力というものを持っていました。

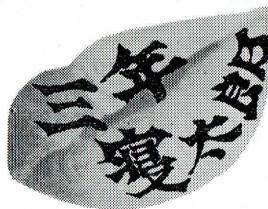
夜ふけ時のことです。庄屋さまがおやじを引っこりに来ました。でもおかげには、あとからお代官さまが子分と一緒におかのもとに来るということがわかつっていました。

やつとのことでおやじは庄屋さまの家から脱げ出しきつたが、我が家に帰ってみますと、戸が開け放たれていて、その上おかげの姿がみえません。するとイロリの上に「赤い陣羽織」が掛けてあります。お代官さまの着物も置いてあります。

おやじは考えました。

陣羽織を着込んだおやじは、代官屋敷へと……。気がついたお代官さまはあわてて自分の家へ……。でも百姓の着物を着ていては家には入れません。奥方さまはお代官さまの素行調査を始めました……。

木下順二・作



■スタッフ

演出＝鈴木朋三・神尾賢一
舞台監督＝宍戸謙二

照明＝岸部承道

効果＝堀川義矩・鈴木総兵衛
マイク・アップ＝白川満子

衣裳＝野末ハナ

■キャスト

寝太郎＝松江昭彦

ばあさま＝野末ハナ

勘太＝木下浩一

長者＝鈴木朋三

娘＝白川満子

大男＝平井治

百姓一＝吉田徹

■あらすじ

ここに、長いこと、働きもせず、ごろごろと朝から晩まで、寝てばかりいる怠けものの男がいる。

いつのころからか、世間の人々は、この男を“三年寝太郎”と呼ぶようになった。今では、もう、すっかり本名は忘れられてしまっている。この男のば

あさまですら、“寝太郎”と呼んでいるのである。

この寝太郎があるとき、一計を案じた。金儲けである。それがまた、いかにもこの男らしい。劣せずして、勘太から、金を詐取しようと企んだのである。コッコツと働いては、小銭を貯めこんでいる勘太は寝太郎にとって、目の上のタンコブだった。案の定、欲ばかりの勘太は、まんまと寝太郎の口車にのってしまう。ありふれたただの鍋なのに、火にかけなくても湯がわく鍋だといわれれば、だれでも食脂が動く。勘太もその例にもれない。全財産の三十両を投げ出して、それを買い取る。

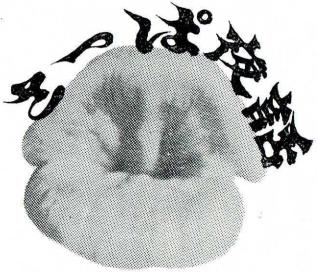
だが、こんなことは、すぐバレてしまった。予期しない方向にことが発展してしまう。あげくの果てはムシロ巻きにされて、川に放り込まれることになってしまった――。

■演出のねらい

長者という金力に裏づけられた権力者と長者にへつらう勘太のような人間に對して、弱い立場にある農民は反撲する。そのエネルギーの爆発——それは寝太郎を代表して行なわれた。意図はそこにある。

* 劇団石っこ

竹内勇太郎・作 * 国鉄演劇部



■スタッフ

演出||牧野照彦

演出助手||山田美代二

舞台監督||松本直

装置||笠原広・布施佑一郎

照明||早川幸夫

効果||井ノ口恭義・渥美昌博

衣裳||太田喜雄・内田定雄

■キャスト

阿加作||尾崎知次

獵師||牧野照彦

母狹||佐藤美也子

娘狹||鈴木久代

■あらすじ

なぜじや、同じ人間でありながら、春は桜の舞、秋は都人のくらし——それにひきかえ、わしらのみじめさときたら……。えい、百姓なんぞ、人間のすることでねえ。肥抜けついで、土まみれ、牛馬のよううに働きつづける百姓なんぞ、人間のすることでねえ。

都へ行けば楽しい暮らし、面白いことが、山ほどあると夢のようにあこがれ、お袋さまを捨て、かわいいあざさを捨て、ただ、安楽で樂しくらしがしねえ。

てみたといと、都にのぼつたが、なるほど、都は美しいところだったが、その美しさは、家や着物だけのこと。人の心は、水より冷めたく、スキあらば、人をだまし、人を踏みつけて、ただ願うは、おのれの榮達——恐ろしや地獄のように荒れはてたところでしただ。お袋さま、あざさよ——なんで、ぼっくり出て行つた愚直な田舎者に果報があるものか。働いても、働いても、しょせんは間抜けの田舎者。冷めたいフトンにくるまって、疲れた体でみる夢は、いつもやさしいお袋さまの夢じや。恋しいあざさの笑つた顔じや。そして、れんげの咲いた春のたんぽじや。わしらの本当の幸せは、やはり、故郷のさっぱの里で、楽しく三人でくらすことじやと、身にしみた。この10年、働きつづけてきたものの、残るはこの身体ただひとつ。だが、その身体さえ、カサカサじや。いや、身体ばかりか、心まで荒れはてた。

ああ、阿加作はアホじやつた——。

つち、つち、くろいつち

働いても働いても、樂にならないくらしを

あかるくするために

つち、つち、くろいつちは叫ぶ

汗のにじんだ、くろい手のひらに

くろいつちは炎える

急いで下さい時間ですから

紫色の光の中で、口笛を吹く

■この期に及んで、△時代

的な制約△を得体のしれぬ威力（背景）として考えるのは、行き過ぎかもしれない。現在、眼の前で行なわれつつあることが、すでに歴史の制約を決定するのだと思うことの方がぴったりしている。しかし、その間にも、論義のゆとりも許さず、時代は急旋回していく。器用な人はその時代にうけ答えして生きている。われわれはこれらの人を“正体不明の人”——と思う。だが、われわれはそれらの人たちが集まつた、いわば、群衆の中を泳いでいた。だんじて、われわれは、この世界の異端者になつたとしても、疎外△する△より、△される△方をとりたい。追いたてられるような背景

風にゆれるコスモスの赤と白

トゲのないバラのように・・・

わたしたちは寄りそが・・・
わたしたちは寄りそが・・・

止ることもしなければならないのだ。幸い、われわれの△僭越△な心意気が、いくばくかの△時間△と△休息△をみつけたので、思ひきって、この世界を立て割りにしてみた。もちろんそれをしたからといって、何の変哲もない。いうなれば、△空虚△があるばかりだ。なぜか、△禁斷の実△をかじつたような、後味の悪いものだが、われわれは作業を続けたい。△音△や

△光△は、たまたまこのつましい作業に必要な、もつと、端的にいえばわれわれの△僭越△をカモフラージュする、いわば小道具だと思っている。

50 40 30 20 10

偉大なるなまの為に乾杯△
エピローグ

時刻と時刻・ことばとことば

あらゆる愛の絆の底△・・・
わたしの言葉は通じない△・・・
わたしの言葉は通じない△・・・

を意識しながらも、われわれは、やつぱり、前へ進むことも、後へ戻ることも、止ることもしなければならないのだ。幸い、われわれの△僭越△な心意気が、いくばくかの△時間△と△休息△をみつけたので、思ひきって、この世界を立て割りにしてみた。もちろんそれをしたからといって、何の変哲もない。いうなれば、△空虚△があるばかりだ。なぜか、△禁斷の実△をかじつたような、後味の悪いものだが、われわれは作業を続けたい。△音△や

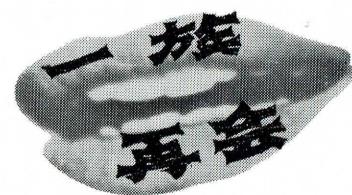
彼らはわたしを追ってくる
わたしは先へ進むのはなら
†光と音による習作△ない



* 剧団なかま

福田恆存・作

* 浜松放送劇団



■スタッフ

演出||村越一哲

舞台監督||山本照子

装置||村松勇・佐野千代子・近藤稔之・柴田隆之

照明||斎藤千春・小杉和子

効果||沢木まり子

小道具||木村明美・石野昌子

衣裳||水村春江・竹山美弥子

記録||村木早苗・田島正子

■キャスト

樂二||岡本和孝

ゆり子||松山ひろゑ

五郎||中村昂平

文子||鈴木利枝

■解説

福田恆存氏のこの戯曲は、昭和31年5月、「文学界」に発表されたもので、過去においては、昭和33年9月に文学座がアトリエ公演として、とりあげてある。その時の演出は閑堂一であり、配役は次の通りだった。

樂二||小池朝雄、ゆり子||文野朋子、五郎||杉裕之
文子||佐野タダエ。

さらに、近々、文学座で公演されるともいわれている。処女作「最後の切り札」以来、「キティ台風」「堅豊奪取」「恋愛合戦」等々、この作者の一連の作品は、一見皆、風変りなものが多い。ということは、従来の日本の戯曲の中に、このような、喜劇や風刺劇がなかったからである。その証拠に、これらの作品は発表されるごとに、問題作として、とりあげられ、上演され、新鮮な作品として、評価されてきた。この「一族再会」も、その例にもれない。

樂二とゆり子という夫婦、五郎と文子という使用人同士の組み合わせが、樂二と文子、ゆり子と五郎という組み合わせに変わっててしまう。やがて、それが「耳飾り」を触媒にして、最後は、△一族再会△へと発展していく。なんといつても、この戯曲の面白さは、計算された構成と、いたるところに、満ちあふれている知的なセリフである。そういう点では文句なしに楽しめる「オトナの芝居」であるといえる。したがって、そういう面白さを生かすために、キメのこまかに芝居造りが、どうしても、要求される。しかし、それが、どこまで、舞台に具象できるか?——おアトは、とっくりとご覧いただいた上、——ま、シャレた喜劇とオボシめいただけたら、まずは、成功と考えている次第。

劇団往来 *ズバリ／一言／わが劇団の消息

■劇団だるま

劇団創設時から8年間
8本の劇を浜松、磐田、引佐、袋井等
で上演しましたが、若い者の集まりで
もあり、そのうえ職場や家庭をもつて
いますので、劇を完成させるまでの努
力はなみたいてはありませんでし
た。その期間に籍を置いた者は
ざつと、48名になりますが、現在活動
している団員は11名余り。

大声で歌い、ダベリ、時には口から
泡を飛ばしての激論を交え、目に涙し
て失恋の痛手を打ち明けることもあります。
劇団員同志が信じ、愛し合うな
かで、つねに、「プラス・アルファー
」を求めて新しいエネルギーが劇団だ
るまにみちあふれています。

■劇団石っころ

昨年の11月、職場の
仲間（浜名高校職員）が、演劇を通し
て、お互いを知り合い、理解を深め、
職場を明るいものにしようという意図
でつくったのが、この劇団石っころで

ダシにされたサクラにみえてくる。彼
らが反対に演技して、背すじを硬わば
らせて、カーテン・コールをする、矛
盾。「きもつ玉おつ母とその子供たち
」はよかったです、と語り合うその宵のコ
ーヒーは甘いのだろうか？何だか、わ
けもなく、その劇が下手くそであって
くれたら——との思いにかられる。も
う、『器用』な演劇は沢山埋没した
文化遺産のような新劇を、羽織、袴で
見なければ、あるいは、やらねばなら
ない理由がどこにあるのだろうか？

■浜松放送劇団

昭和21年に創立とい
うから、来年はわが劇団も成人式を迎
える。だから、その話題でもちきりだ
すでに、記念公演の準備中。目下のと
ころ、村越一哲・作『浜松』（仮題）
4幕の大作を用意、気を吐いている。
古い家柄を誇る「田村一家」が戦前
戦中、戦後にかけて、いかに、変つて
いったか、その家族の人間ドラマに併
せて、『浜松』という街の推移と息吹

す。当時の目標は卒業のときの予餞会
で発表し、生徒に演劇の楽しさやよろ
こびを知つてもらうと共に、卒業し
て行く生徒がやがて職場に入り、その
職場をなんらかの形で明るいものにし
て行つてほしいと考え、ひとつのヒン
トにでもなればということでした。

このたび、不遜な考え方を起し、芸術
祭に参加することになつたのですが、
不安で胸が一杯です。だが、精いっぱい
演じて力をためしたいと考えています。
私たちは職場の中で、仕事に忙殺さ
れる昨今ですが、なんとか暇をみつけ
ては継続していきたないと、あらたな決
心を確認しあつたところです。

■国鉄浜松工場演劇部

秋の陽ざしがいっぱいまとっている
この古びた食堂の片隅で
ボクともうひとりのボクが
きみたちを待ちうけた

常に大勢になる予定なので、研究生と
して、お手伝していただけたら、これ
幸い、双手をあげて歓迎します。
いつも、可憐な娘役専門のM嬢、今
年は奇しくも、中年のマダム役。しか
も、若いツバメをクドかなければなら
ぬとあって、大弱り。「もつと、色氣
を出して——」の注文に、「私、まだ
結婚もしてないのにあんまりだわ——
」とホロリ。

■劇団からつかせ

劇団は10年余の歴

史を持っているが東日本リアリズム演
劇会議に加盟し「働く者の演劇」をめ
ざし始めたのがここ3年ほど、私たち
は遠州地方の働く人々の生活から学び
ほんとうに見たがっている演劇をさぐ
りだし、明日に希望をもたせ、現代社
会のもつている矛盾を打ち破っていく
ようなエネルギーを掘りおこす作品を
創造したい。来年度の「牛鬼退治」に
御期待を。

■劇団麦

生れてから、もう一年半に
なつた。私は演劇が単に好きだか
らやるのではなく、生活の一端として

ボクともうひとりのボクの前方に
「ヤア」と小さく洩らして
そっとかみしめた

11月27日のよろこびを

20年目を迎えた稽古場で

ボクともうひとりのボクが
きみたちの舞台をみた

ボクともうひとりのボクの前方に
手を叩き 頬をほころばせて

ボクとみたちはどこへ行くのか
はつきりと知り

うなついていた （牧野）

秋の陽ざしがいっぱいまとっている
うシロモノをつくり出すために、ベニ
ヤ板少し、身振り少々、セリフもちょ
っぴり、道具立ては「立派」につく

られて、私たちの前に披露される。こ
の程度の模写で当の世の中をゆさぶろ
うとする甘ったれ。私たちが大目にみ
ながら、演劇を見る必要はさらさらな
いはずだ。観客はデッヂ上げのための

■劇団なかも ムードとか感動とかい
うシロモノをつくり出すために、ベニ
ヤ板少し、身振り少々、セリフもちょ
っぴり、道具立ては「立派」につく

うシロモノをつくり出すために、ベニ
ヤ板少し、身振り少々、セリフもちょ
っぴり、道具立ては「立派」につく